



DRIES

地球の鼓動が聞こえてくる

表紙写真

ヤギや牛に引き倒された木は砂漠の熱に焼かれ、
二度と緑の葉をつけることはない。
(セネガル)

JICA LIBRARY



1113547(2)

国際協力事業団

26383

SEVEN STORIES

地球の鼓動が聞こえてくる



夜が終わり砂漠に太陽が昇ると気温は40度上昇し、
牛飼いたちはわずかに残った草を求め放牧に出かける。
(セネガル)

険しい山道。早朝から3時間かけて運ぶ新も市場
ではたった50ルピー(約100円)だ。(ネパール)



SENEGAL 砂漠の一滴…… 1

BRAZIL シャーマンの秘薬…… 9

WESTERN SAMOA アオポの奇跡…… 15

CHINA 溶けゆく大地…… 21

PARAGUAY 洗みゆく孤島の野生…… 29

NEPAL 天を突き抜った雨…… 35

QATAR 海を縁どる17000年…… 43

撮影の舞台…… 51

空白地帯をたどる旅…… 53

人々は水を求めて1日に数十kmもの苦しい旅を繰り返す。



砂漠の一滴

サハラ砂漠がセネガル川を越えて押し寄せてくる。

絶え間なく降り注ぐ細かな砂塵は、容赦なく

最後の水の一滴までも奪い去る。

ここでは、水の量が生存できる僅かな命の数を決める。

日本から来た女性が一人、砂を掻きだし、埋もれた井戸を探る。

気も遠くなる日々を重ね、沸き上がる水の宝石の輝き！

野菜畑が潤い、果樹が原色の実を結ぶ。

烈しい砂嵐の中に耐える小さな緑のオアシス。

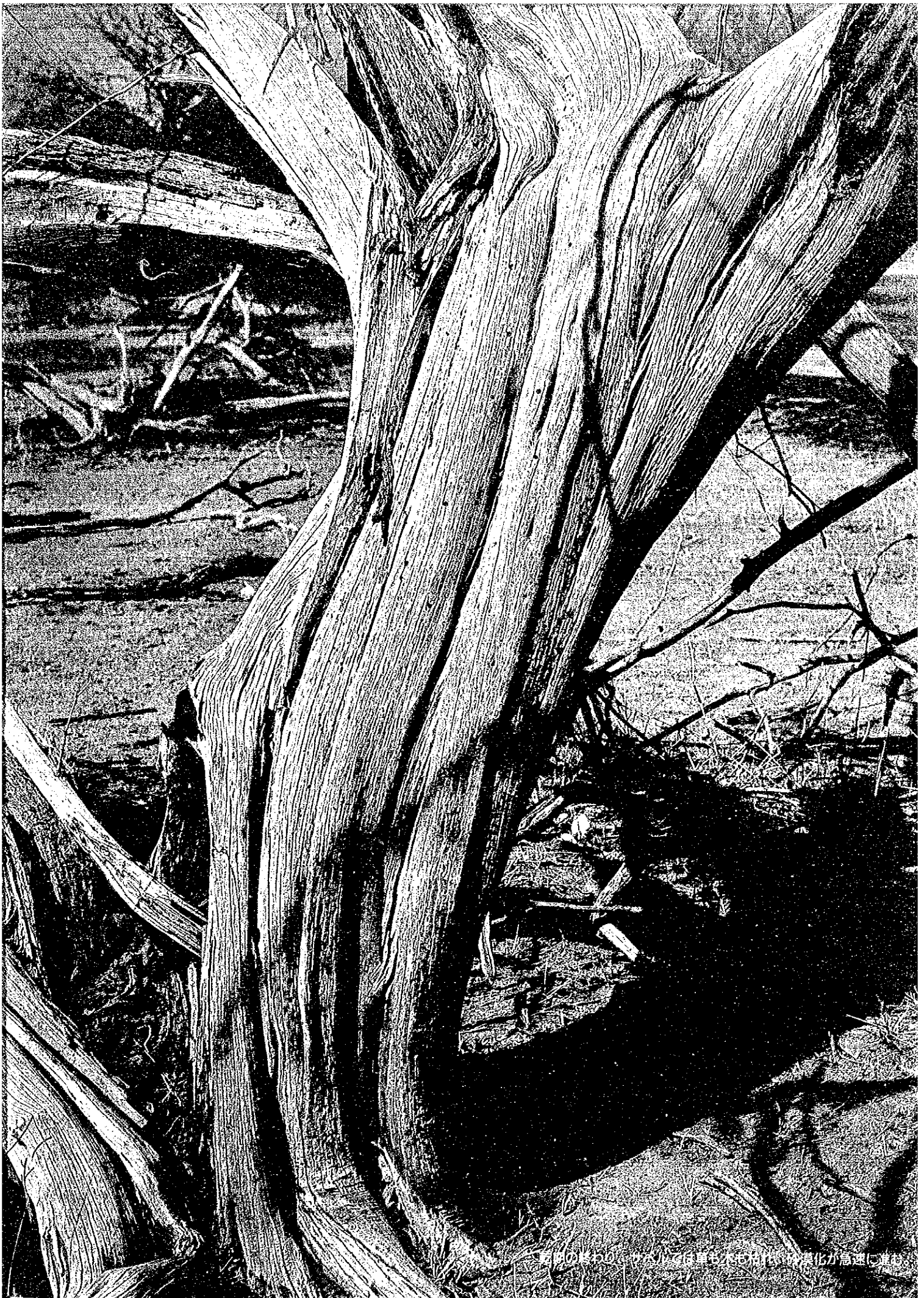
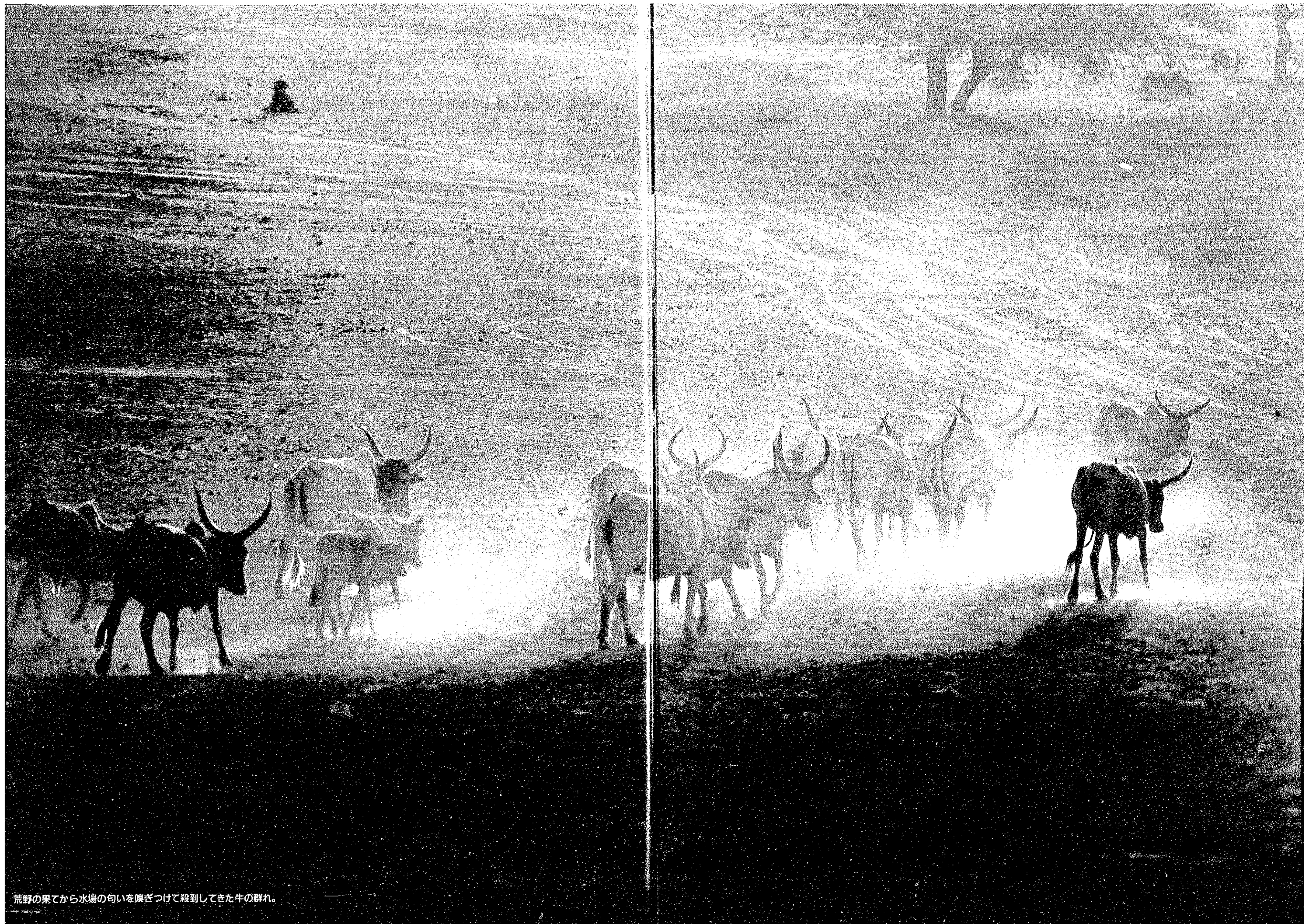


Figure 1.10. A piece of bleached driftwood that has been bleached rapidly.



荒野の果てから水場の匂いを嗅ぎつけて殺到してきた牛の群れ。

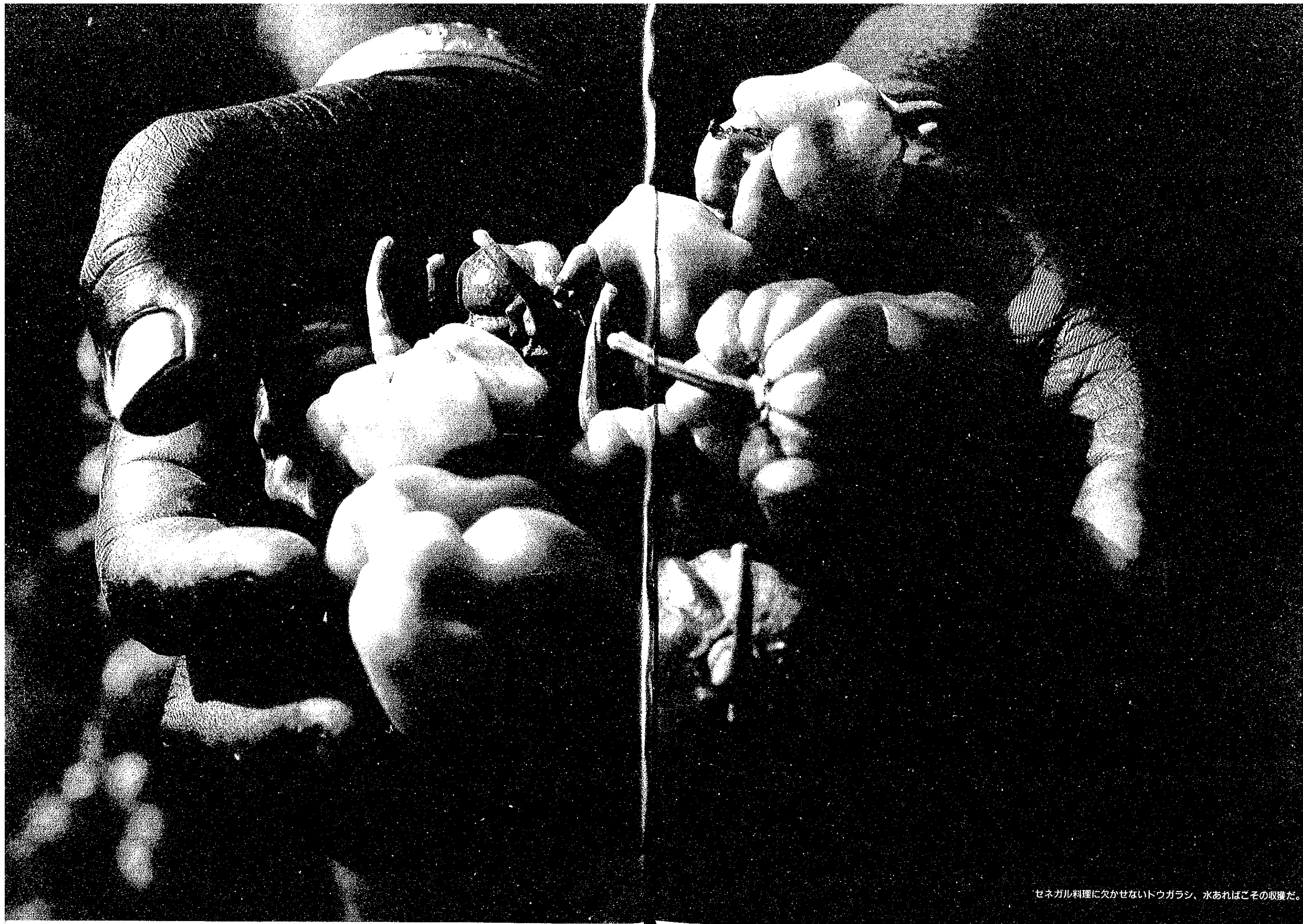


神保みちを協力隊員の専門は植林。
彼女が活動するチャレ村は慢性的な水不足に悩んでいる。
この地方では土地の広さではなく、
水をどれだけ確保できるかで収入が決まる。





日に数回の水汲みは厳しい。だが、水場に集まる人々はそのぬけに陽気だ。



セネガル料理に欠かせないトウガラシ、水あればこそその収穫だ。

乾燥したヘビの頭。アマゾンの民に、お守りとして珍重されている。



シャーマンの秘薬

老婆はいつもその場所に座り、薬を求める者たちに、

森や流れの精霊たちの言葉を伝える。

ブラジル・ベレン市の市場の一角。

おびただしい瓶の中に封じ込められた数千種の秘薬。

約100年前、南米の深いジャングルの中、インディオの薬草から、

アメーバ赤痢の特効薬が発見された。

現代の科学が初めて解読し得たインディオの呪文の正体。

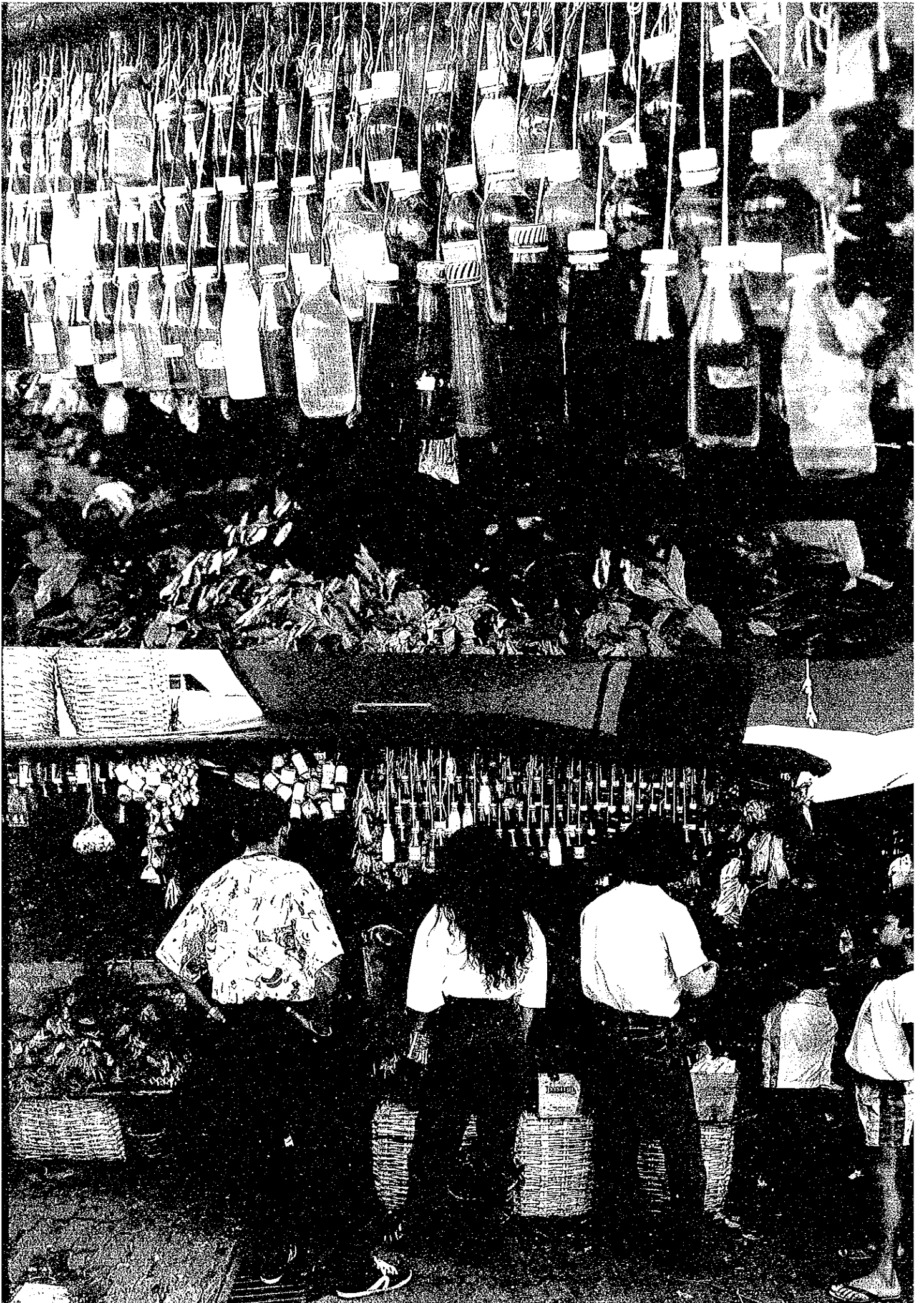
日本人研究者が秘薬の迷路を歩き始めた。

限りないナゾと、底知れぬ魅惑に満ちた茂み。

科学の灯は、まだ点火されたばかり。

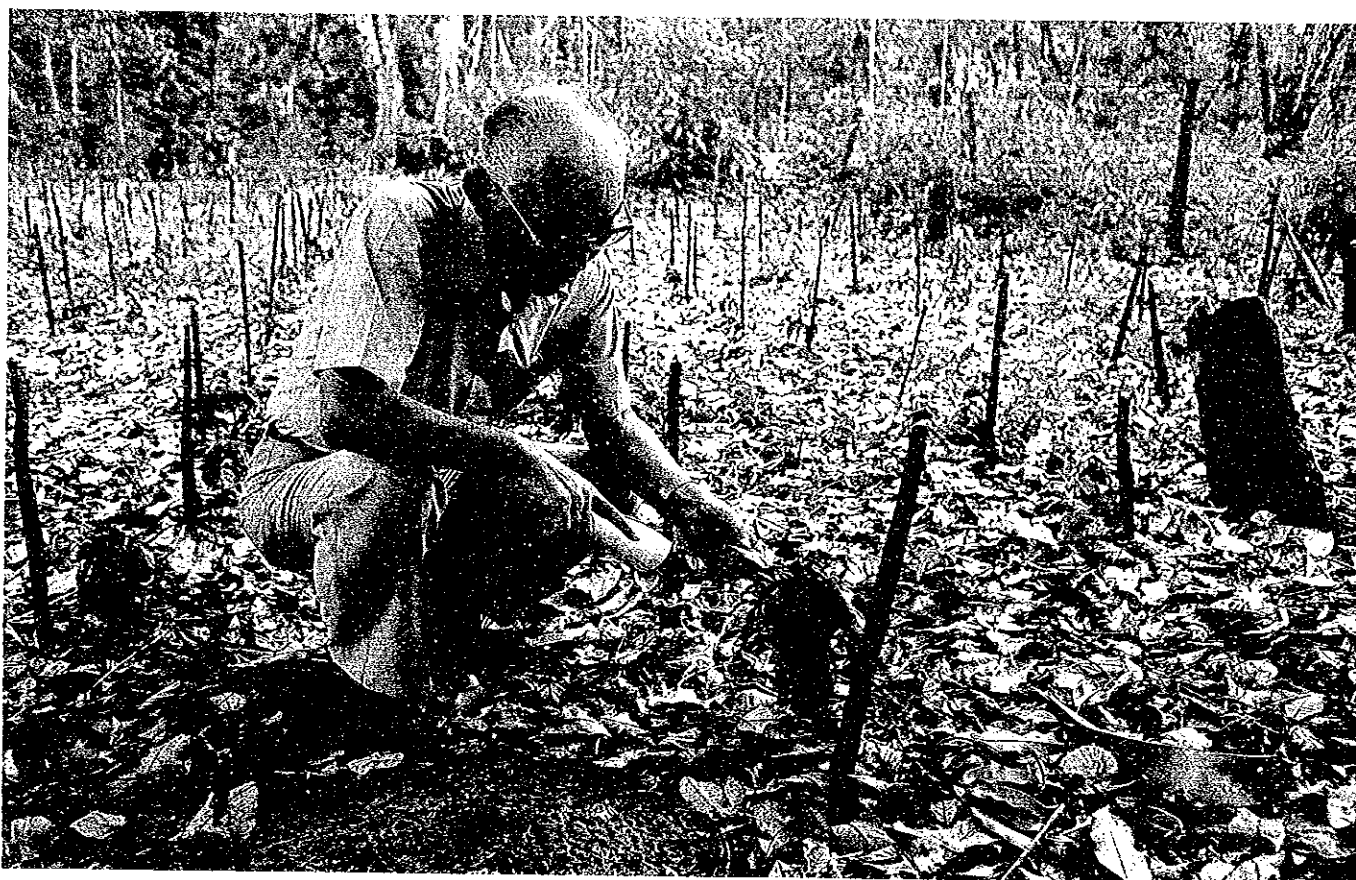


マイシンの症状を助ける。

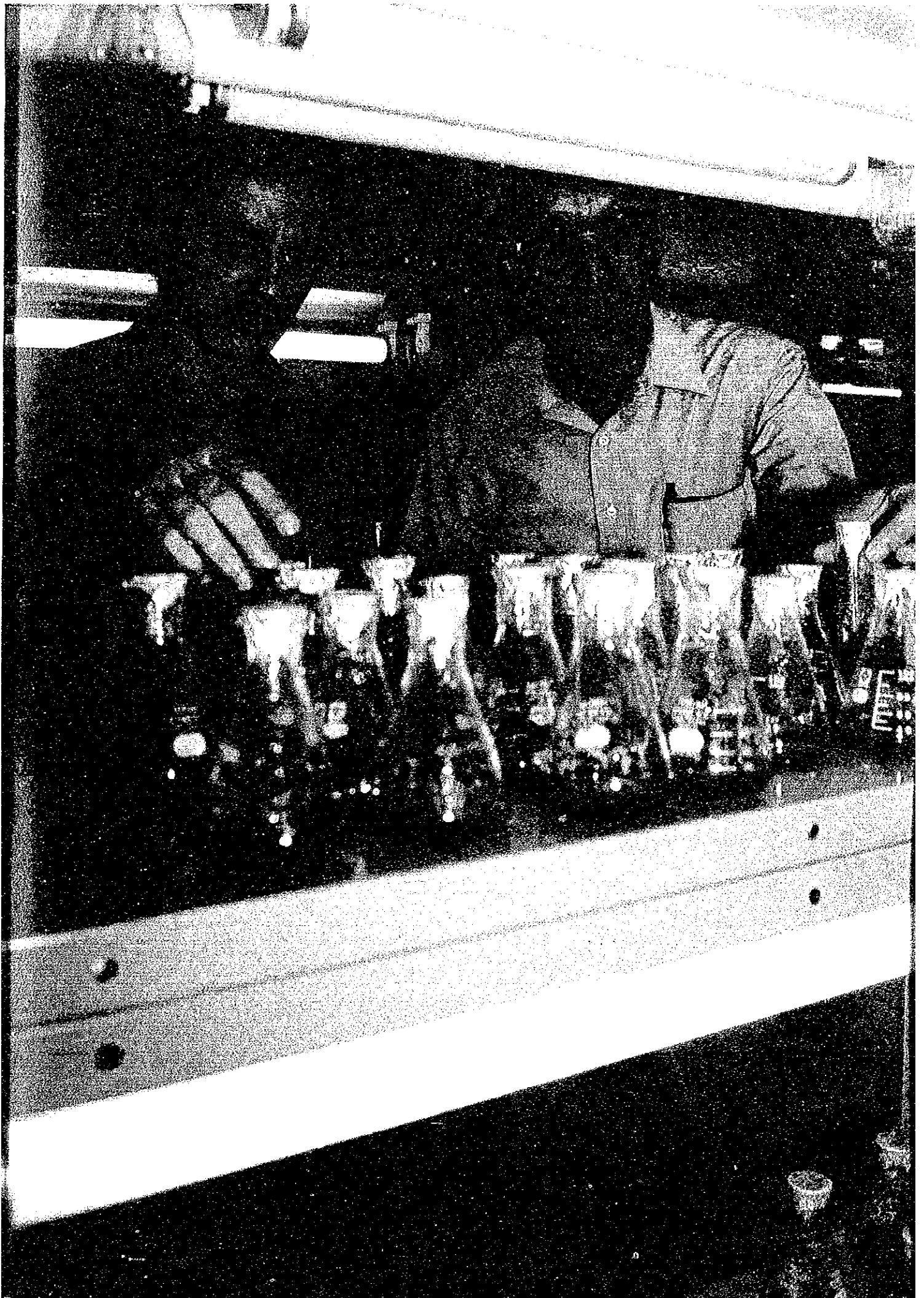




大アマソンの恩恵を宿した秘薬。
人と精霊の対話の接点でもある。



仁科雅夫専門家はアマゾン農業研究協力計画プロジェクトの一員。
古来、インディオが用いてきた数多くの伝統的な薬用植物の中から、
科学的に薬用物質を抽出し、利用方法を確立するために働いている。



補原健一協力隊員は村落開発普及員。
毎夜、今日を記録し、明日の計画を練る。

アオポの奇跡

西サモアの島々。その一つ、火山島サバイイ。

アオポ村はその島の溶岩原の上にある。

地に水はなく、乾期には天は一滴の雨も与えてはくれない。

一つの諺が生まれた。アオポ村に雨が降る。

決して有りえないことが起こるとの意味。

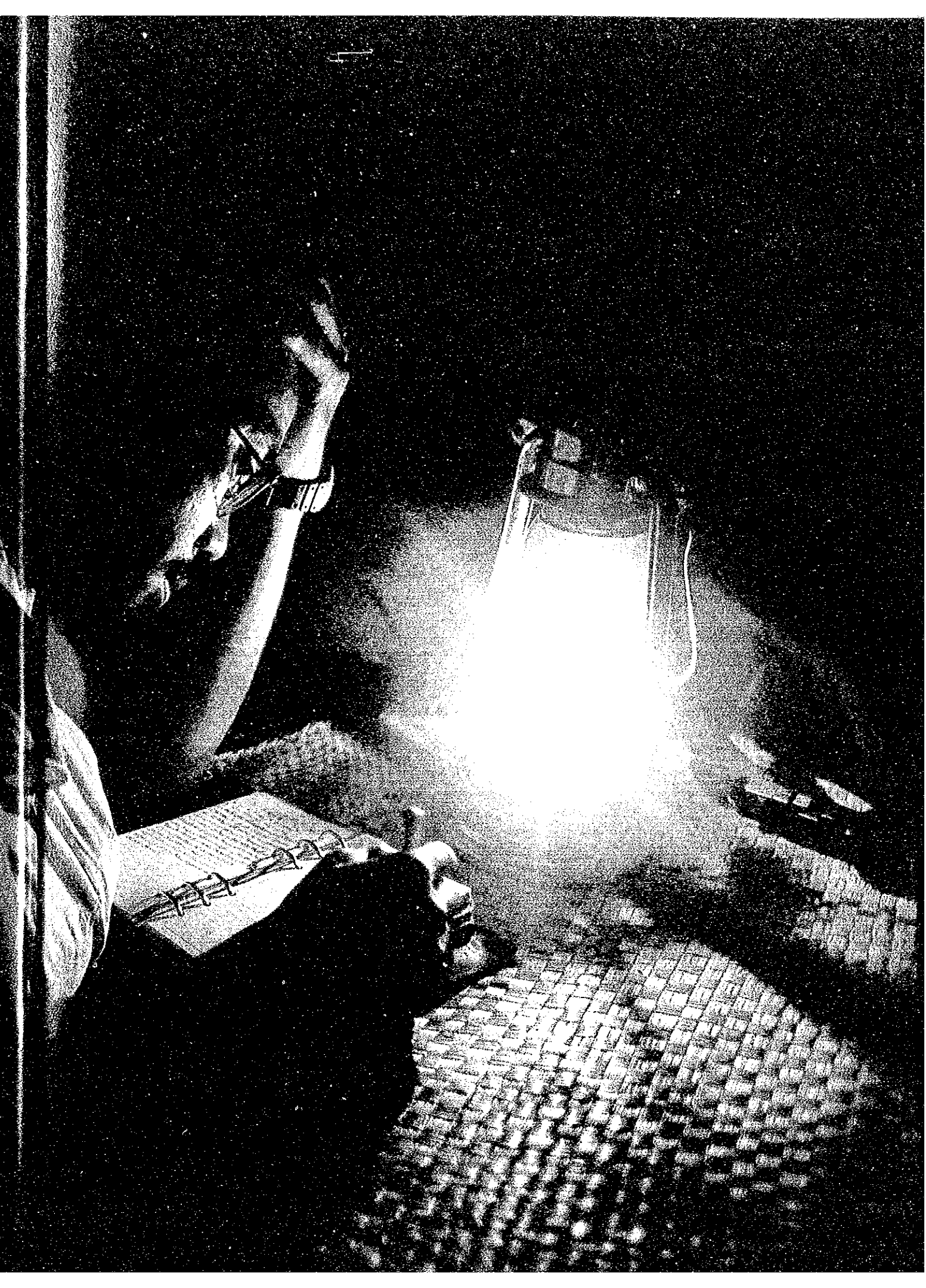
ある日、一人の日本人が降ってきた。

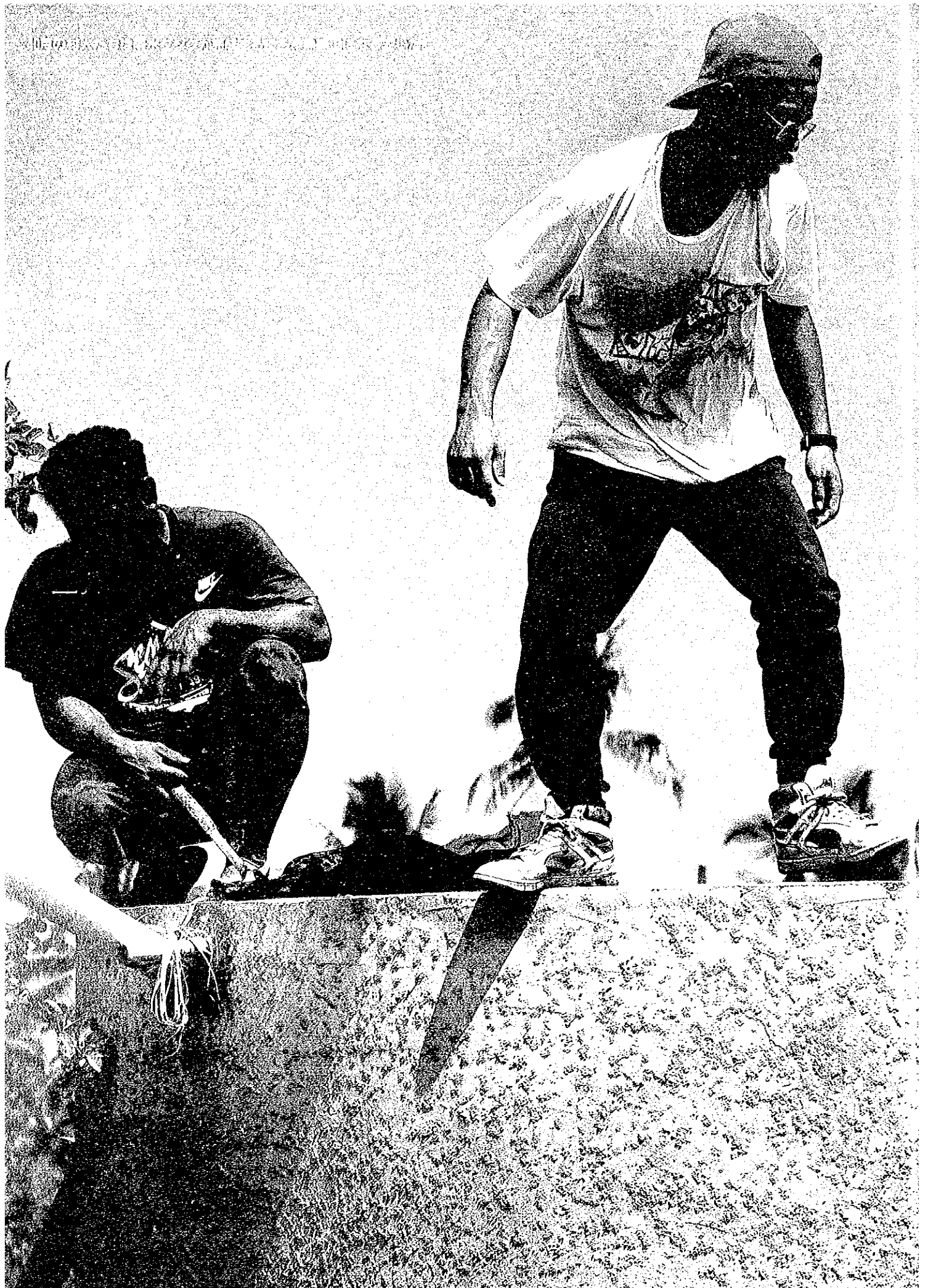
その若者は村人と力を合わせ、

すべての家に47個の雨水タンクを完成させた。

雨期に雨を貯えれば、乾期を乗り切れる。

かれは奇跡を起こした。





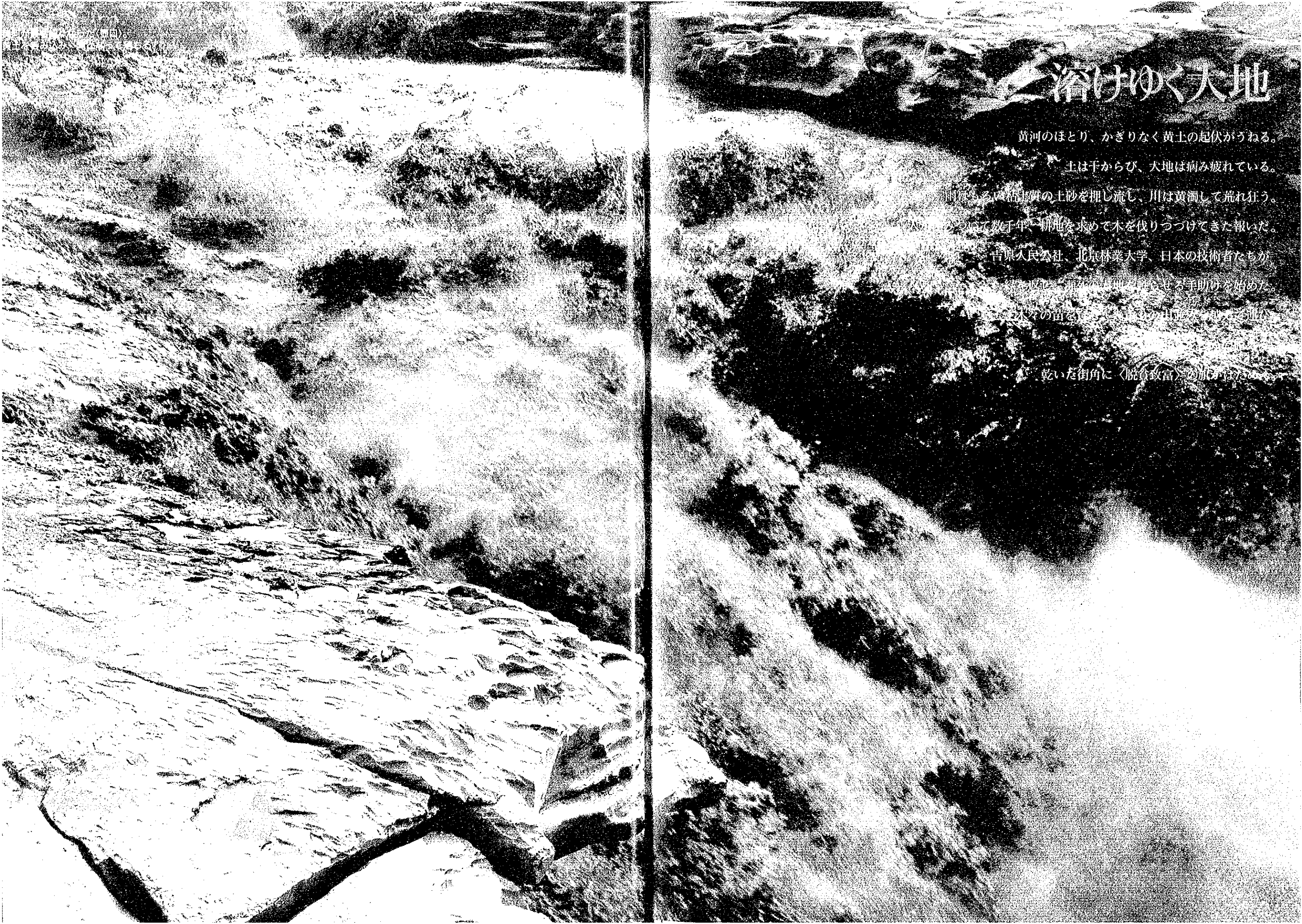




アオボ村の長老は楠原の功を讃え、大家族の家長にあたるマタイの称号を贈った。

水不足は悪夢として去った。
あふれる水のきらめきに村人の顔がほころぶ。





北京の黄土高原(中国)
1971年10月撮影

溶けゆく大地

黄河のほとり、かぎりなく黄土の起伏がうねる。

土は干からび、大地は痛み疲れている。

雨がもたらした質の土砂を押し流し、川は黄濁して荒れ狂う。

人々はかつて数千年、耕地を求めて木を伐りつづけてきた報いだ。

吉原人民公社、北京林業大学、日本の技術者たちが

植林と灌漑の地を回復させる手助けを始めた。

水が不足する中、大規模の山岳開墾による灌漑

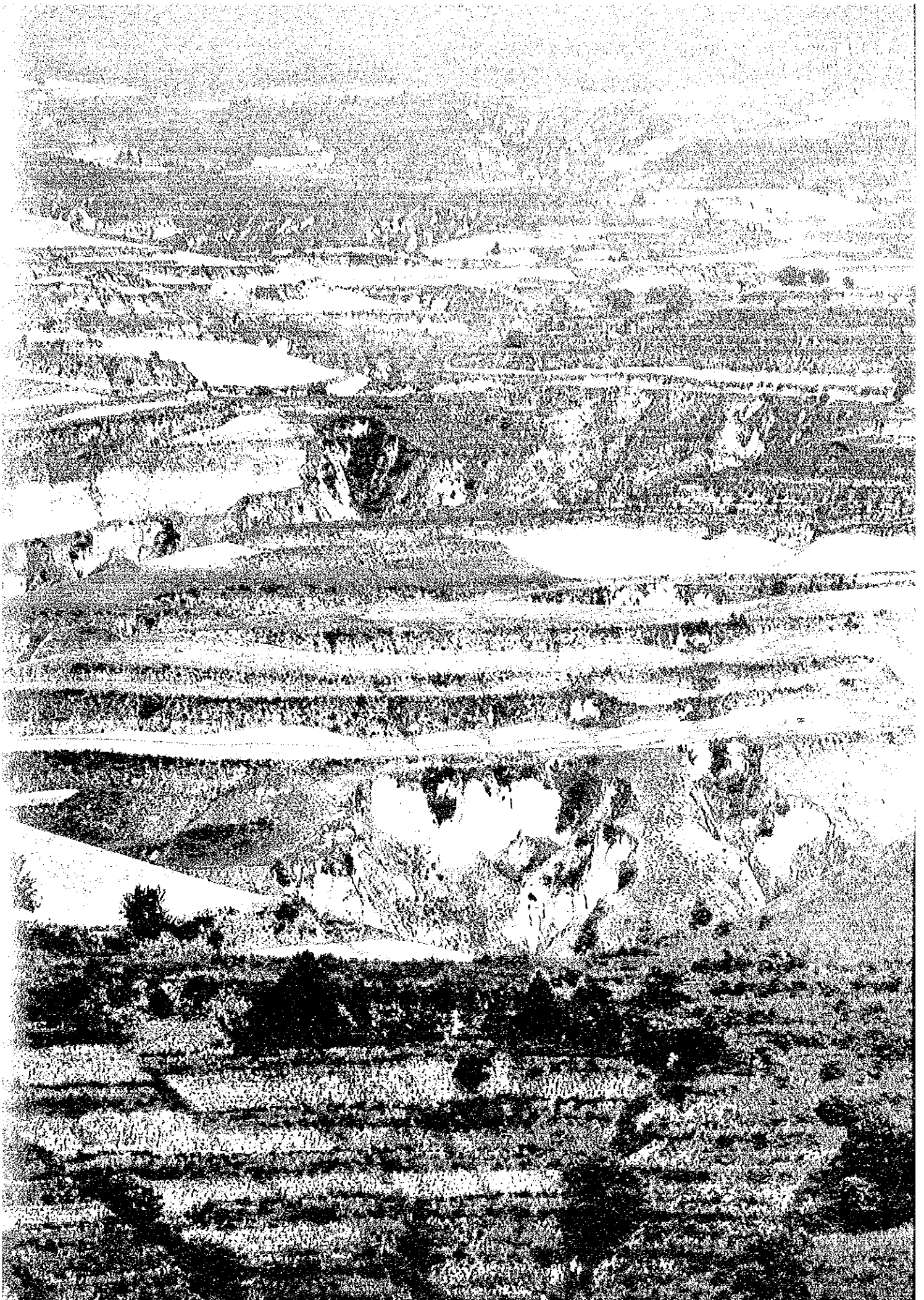
が、この土地に水を供給する。

乾いた街角に〈脱貧致富〉の旗がはたき出す。

日本の援助で進む植林試験区。
緑化と同時に土砂流出を食い止める。



黄土の大地をゆく黄河。
大量に混じる土砂のために魚一匹住まない。





リンゴ、ナシ、アンズなどの果樹も育ち、農民の暮らしが潤う。

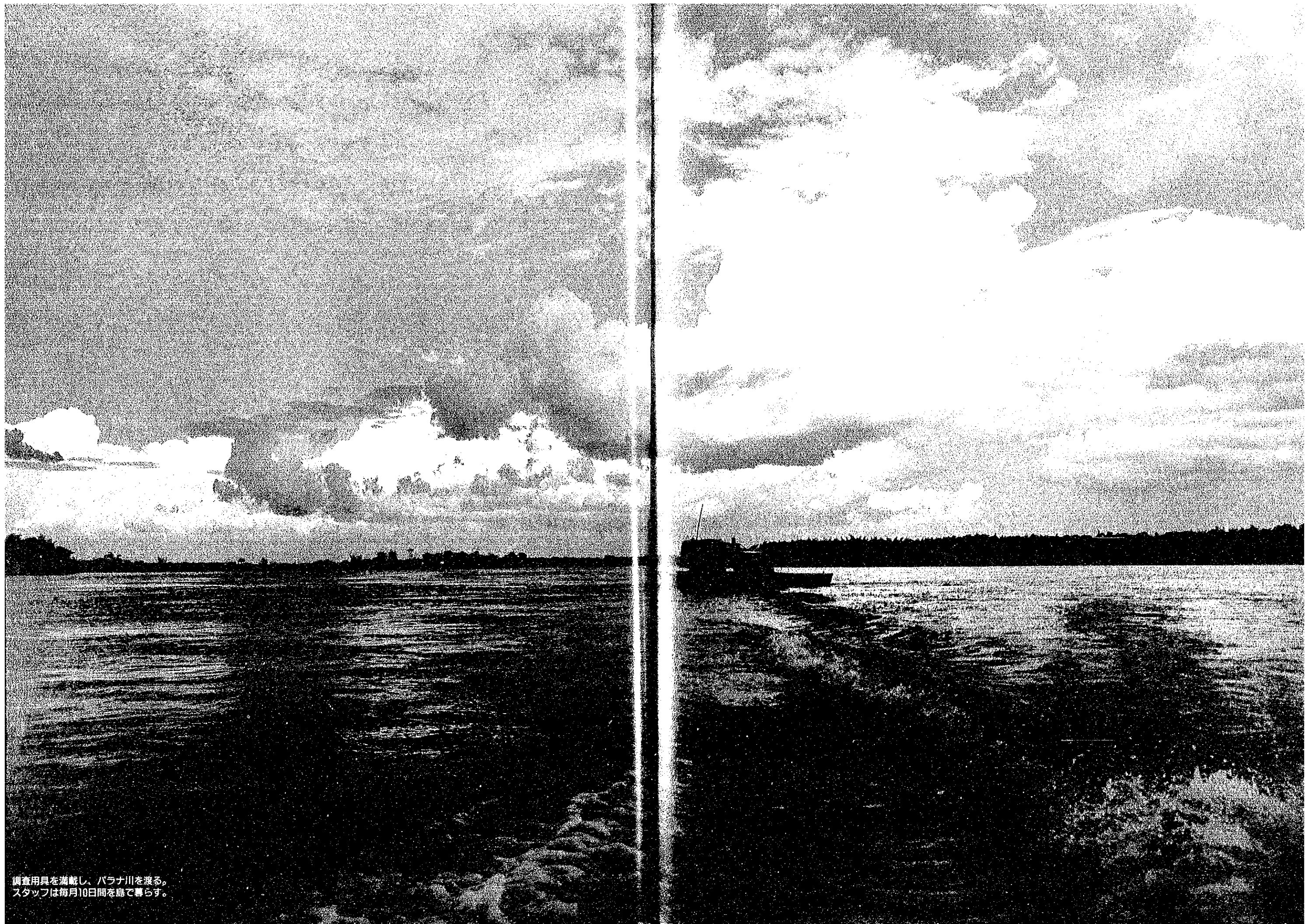
ニセアカシアの花から採れる蜂蜜。
王さん一家により収入をもたらす。





沈みゆく孤島の野生

南米パラグアイの大河パラナ
その流れに浮かぶ総面積16万haのサミレタ島
グテカミオネカマやスマシカなどの稀種がすみ野生の園
巨大ダムが、その島影を地形もなく消し去ろうとしている
日本人たちは歩みつづける
野生の命の種類と数をかぞえ、救出の手立てを探る
日本から初めて海外に派遣された
野生生物保護のオロブネンショナルたち
1994年7月、島は水没を始める



調査用具を満載し、パラナ川を渡る。
スタッフは毎月10日間を島で暮らす。



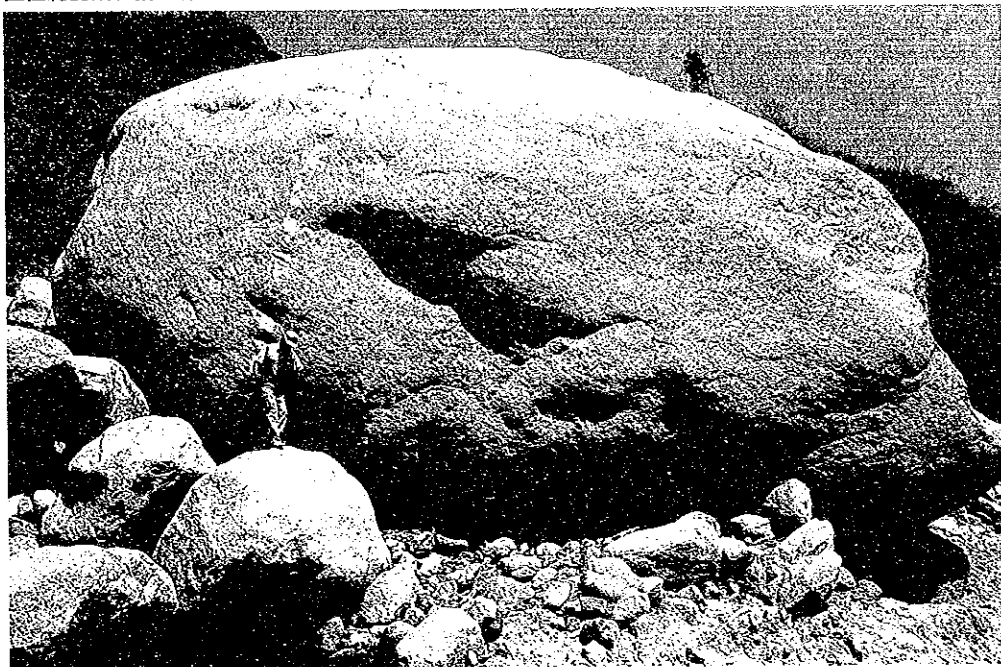
保護されたトカゲ。島が水没すると、泳げないため絶滅の恐れがある。



野生のホエザル。島の運命を悟ってか、夜明けの叫びが物悲しい。



直径約20m、重さ4,000tの大転石。大雨で谷を12km押し流された。



天を突き破った雨

神々の怒りがネパールの山野に炸裂した。

1993年7月、大豪雨がクリカニ川の流域を叩きつけた。

土石流が山肌を砕き、大洪水が下流地方を呑み込んだ。

人はそれでも、生まれ育った土に生きる。

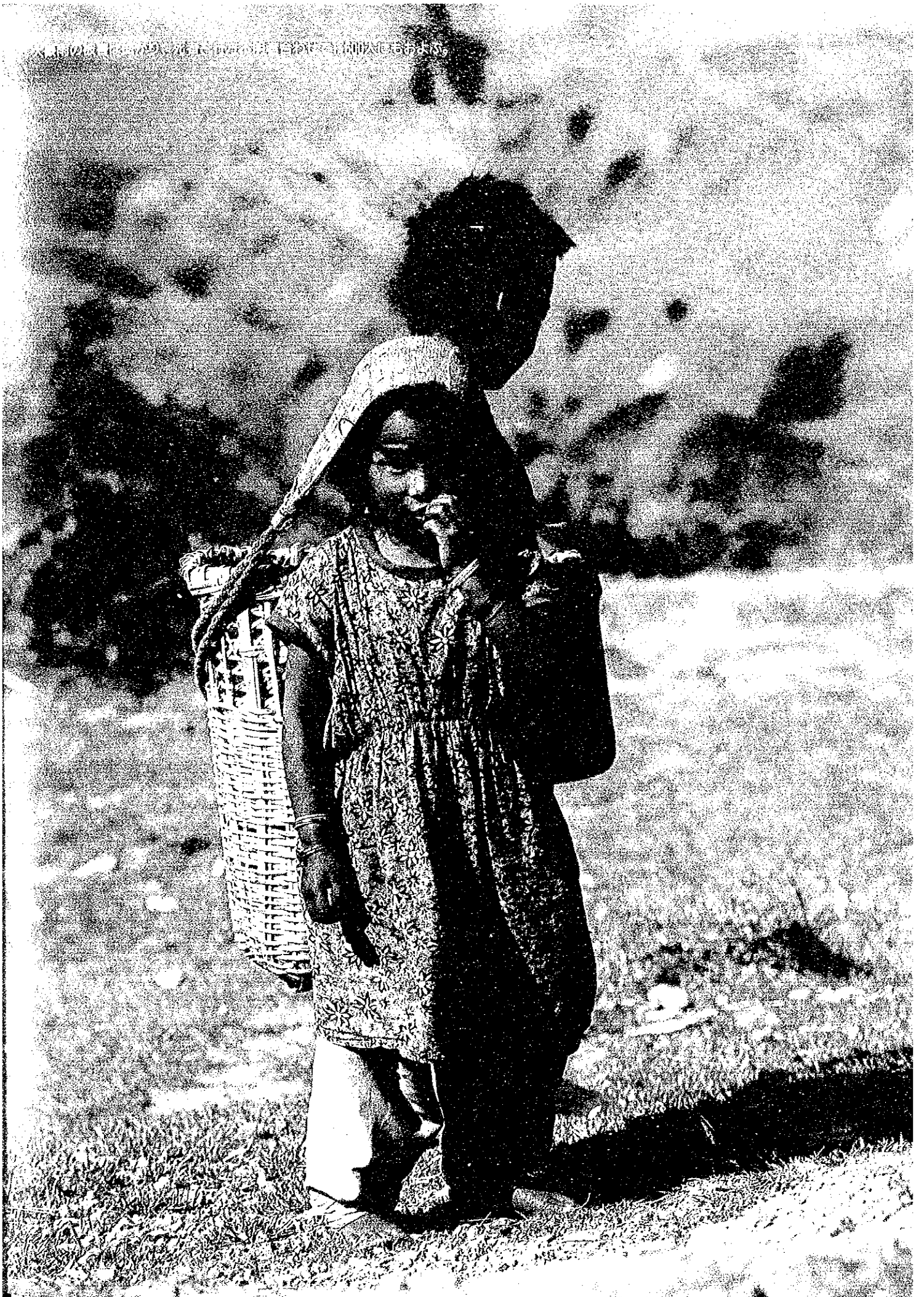
埋没した畑を掘り起こし、種を播き、ひたすら神に祈る。

太古以来の山国ネパールの逃れ難い宿命。

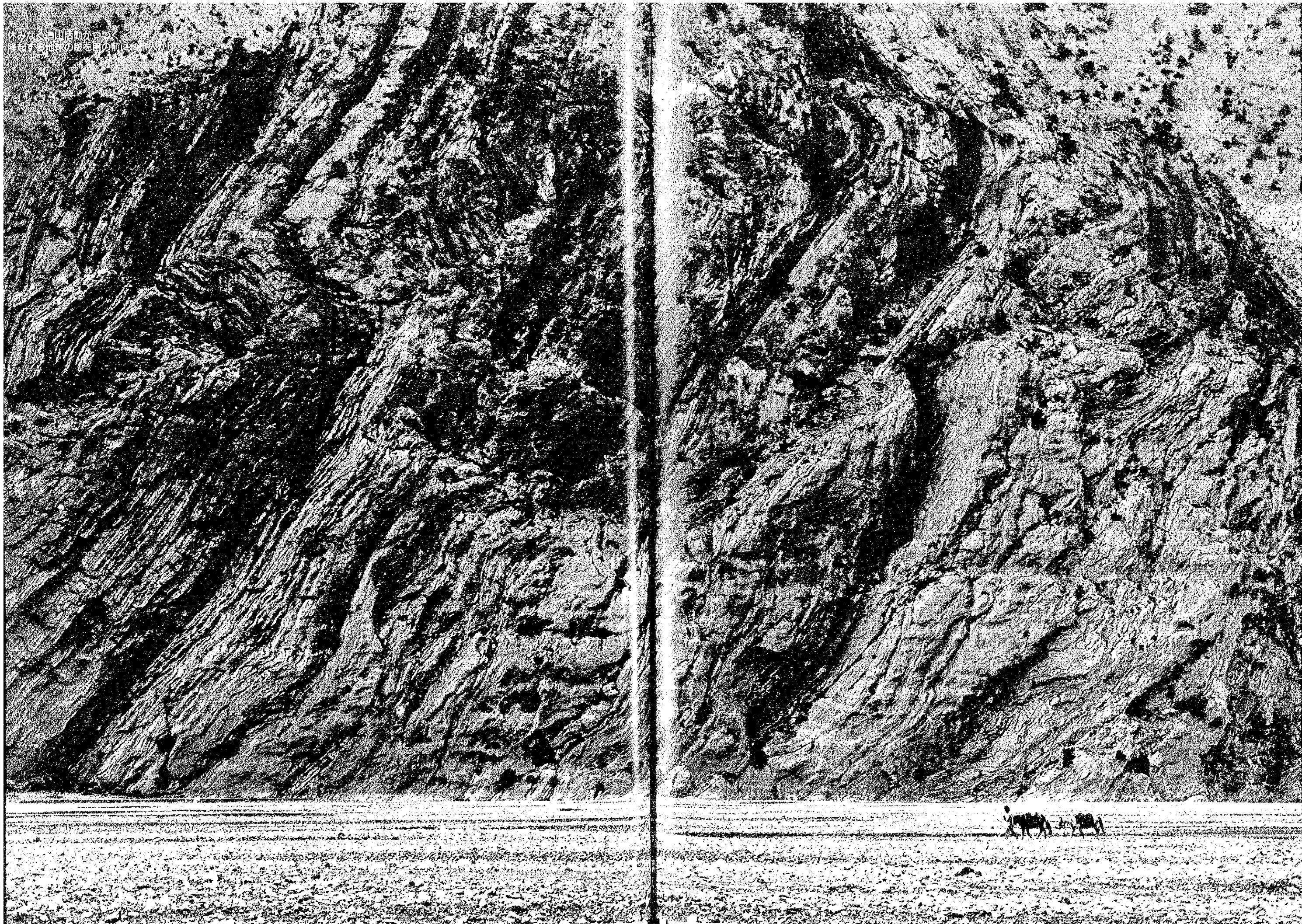
今、日本人技術者たちが現代の目で神の姿を見つめる。

流れの力を測り、岩石を調べ、地層を追って旅する。

科学の日差しが地球の屋根をほのかに染めている。



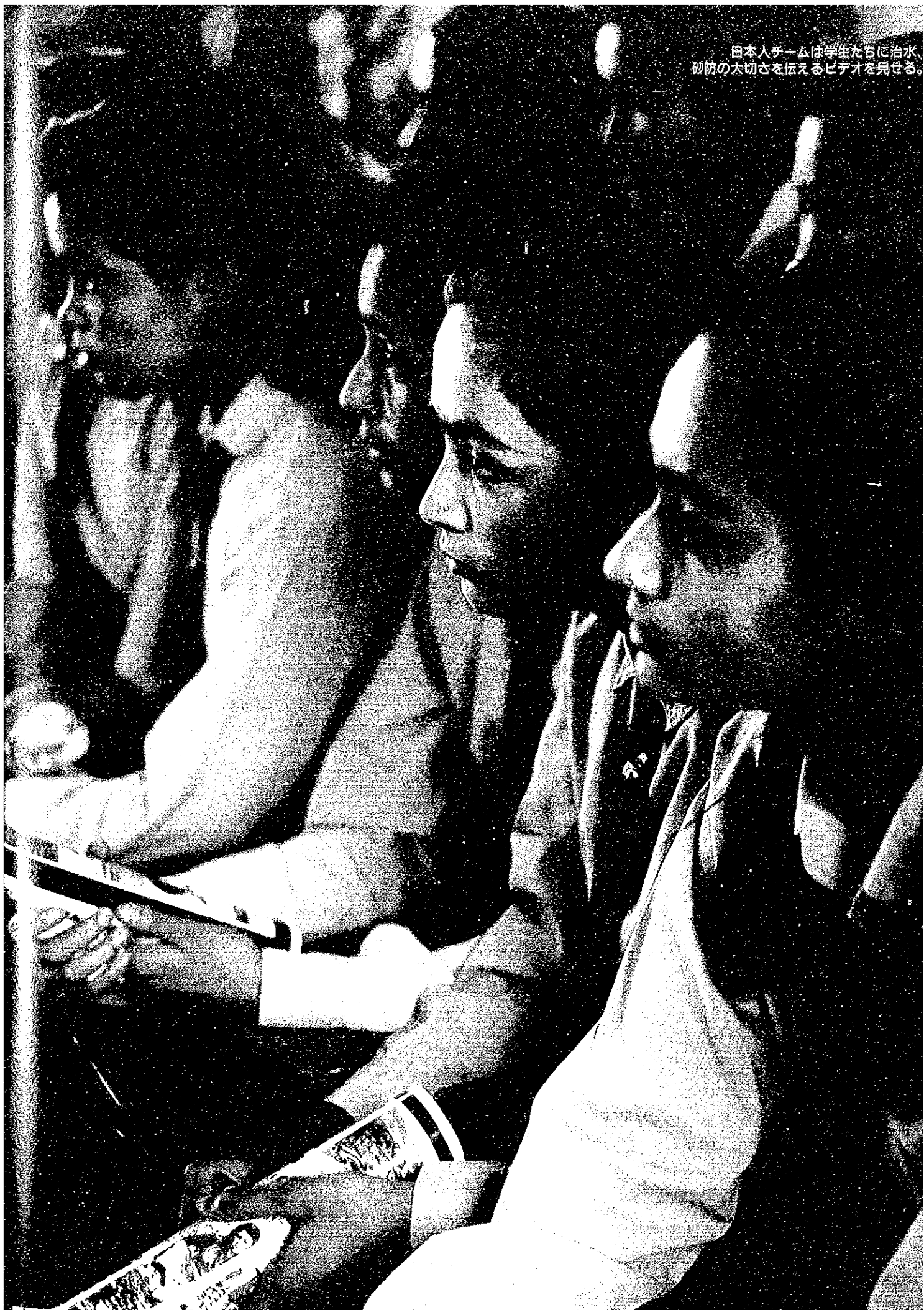
休むなく山崎のく
有るは池の原を甲の前





天尾潔専門家は地滑り対策が専門。
ネパール人技術者と調査研究をともにし、
土砂災害防止の現代技術を、この国の山河に応用させ、
有効な開発を進める途を探っている。

日本人チームは学生たちに治水、砂防の大切さを伝えるビデオを見せる。





耕して天に至る段々畑。40°を超える急勾配。勤労も大天災には無力だ。

7月20日、カタールに到着した。この日は、カタールの歴史が、

緑を植える170000本

ペルシアン湾に面した小国カタール。白砂の渚がベルジャン・ブルーの空の下、ゆるやかに弧を描く。

淡い緑の茂みのほたり、小さな人影が陽炎に揺らぐ。

もう5年間、確実に緑を拡げつづけるマングローブの森。

戦火が燃えさかった日々も——

日本人技術者とこの国の仲間たちは黙々と渚を這いずり回っていた。

カタールの海辺を緑の帯で塗り変える日が来るまで、

かれらの姿が、そこから消えることはない。

極北から渡って来たシギの群れ鳴きが、

今年もまた男たちの空を南に渡る。



苗木を海辺に運ぶ。
単調な作業が炎熱の日差しの下でつづく。







マングローブ植林の須田清治専門家。
豊かな森が生まれ、魚介類や鳥たちが帰る10年後を夢に見る。



マングローブは〈海の命のゆりかご〉。夕べの潮風がやさしく吹いてくる。

撮影の舞台



カタール 海を縁どる170000本

【協力活動内容】

マングローブとは熱帯や亜熱帯の浅海の海岸沿いの砂泥地に、海水にも耐えられる樹木が作る樹林のことをいう。砂漠の国カタールには天然のマングローブは北東部の2つの入江にしかない。カタール政府は1981年からカタール全土の海岸線に沿ってマングローブ植林による緑化を始めたが、新しい植林地の選定、植林技術の改良が進まず、植林地を拡げることができていない。

そこで日本に協力の要請があり、須田清治専門家が1988年から派遣された。湾岸戦争で一時避難を余儀なくされたが、それが自生するヒルギダマシの種子の採取・播種時期に重なって作業ができなかったなどのハプニングも起きた。しかし在来種のヒルギダマシに加え、ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキなどを導入して、これまでに17万本の植林を行った。

【カタールの概要】

長さ160km、幅9kmの半島がペルシャ湾に突き出たような形をしているのが、カタールである。国土を車で1周するのに12時間もあれば十分だという小さな国だ。1930年代に石油が発見され、潤沢な石油収入で国家財政の90%以上を賄っている。教育費、医療費は無料化されている。このほか、労働力の大半を外国人に依存しており（総人口の80%）、酋長制をとるなど、アラブ産油国に共通の特徴が見られる国である。
人口：38万人(1991年)
面積：1万1,427km²(秋田県とほぼ同じ)
首都：ドーハ



中国 溶けゆく大地

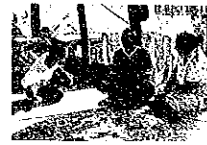
【協力活動内容】

中国、西北部の砂漠の砂が風に乗って運ばれ、長い年月にわたって堆積したのが黄土層。黄土高原では50mから80m、厚い所では100m以上の黄土層が地表を覆っている。黄土は土質がやわらかく、降雨によって流失、浸食を受けやすいという性質をもつ。このため農地や林地が破壊され、森林牧草の生産に大きな被害を与えている。水土保持は建国以来の課題だが、技術の遅れ、技術者不足から新たな土壌

流出区域が未だに増加している。日本の協力で1989年から95年までの予定で始まった「中国黄土高原山岳技術訓練計画プロジェクト」は、土砂浸食と荒地復旧のための技術の確立のために、研究、調査を行うと同時に、技術者の養成も行う。過去3年間に造林した面積は予定を上回る610haに達した。

【中国の概要】

日本とは長い交流の歴史を持つ国、中国。その地理的接近は、春先、黄砂が黄土高原から風に吹かれて海を越え、日本に降ってくるというほどの距離だ。1979年から外資や技術の導入を目的に「経済特区」という制度が開始され、それを契機に市場経済への移行が急激なスピードで展開している。目覚ましい経済発展という成果の影には、都市と農村部の経済格差、余剰人口の都市への流入、都市化や工業開発に伴う公害といった問題も表面化してきている。
人口：11億3,530万人(1991年)
面積：959万7,000km²(日本の約25倍)
首都：北京



西サモア アオボの奇跡

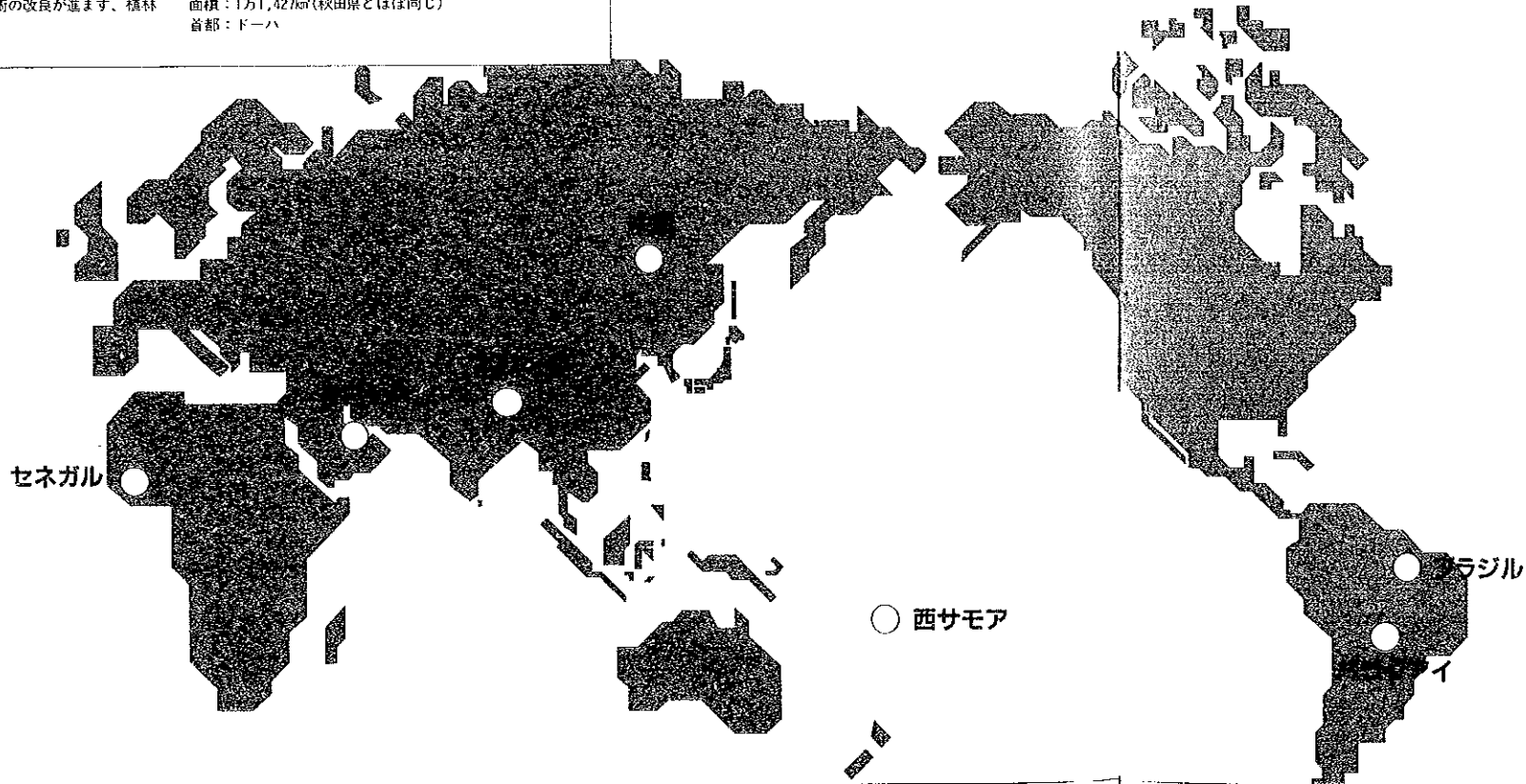
【協力活動内容】

西サモアのサバイ島の内陸部にあるアオボ村は地理的に孤立しており、最も開発の遅れた地域である。溶岩原に立地しているため、長年水不足に悩まされてきた。主な産業はコブラ、タロなどの農業が中心で、海外出稼ぎ者からの送金に頼っているという状況である。このため村の開発を進めるために日本に要請されたのが、村落開発プロジェクトを立案、実行できるような青年海外協力隊員の派遣であった。村落普及員である橋原健一氏は1993年からアオボ村に

入って、アオボ村議会と話し合いながら、村の開発に何が必要かを探ってきた。その結果、まず水不足の解決から実施することにしたのが、各家庭および教会のような公共施設に一つずつ雨水貯蔵タンクを作ることだった。1年半かけて、村人と共に47個のタンクを完成させた。

【西サモアの概要】

ポリネシアに属する西サモアは、ウオル島とサバイ島という2つの島と小島から成る島嶼国である。首都アピアのあるウオル島の方が開発が進み、人口の80%が集中している。この国では伝統的にマイが政治、経済、社会生活とすべての面で権威を持つ。マイとは大家族の家長にあたる称号保持者で、アイガと呼ばれる親族集団の最高位マイは各大家族に宅地や耕地を分け与え、マイの称号をも授ける。各マイは家族の経済活動を管理し、行動を監督するようになっている。国会議員の選挙権、被選挙権はマイにのみ認められており、ほとんどの農地がマイの管理下にあるという。
人口：17万人(1991年)
面積：2,831km²(東京都の約1.3倍)
首都：アピア



ブラジル シャーマンの秘薬

【協力活動内容】

ペルー、アンデス山脈に源を発するアマゾン川は全長6,300kmにも及ぶ大河である。このアマゾン流域が国土の半分を占めているブラジルでは、天然資源に恵まれたアマゾン川流域の農業開発に力を入れている。「アマゾン農業研究協力計画プロジェクト」はこの地域の天然資源を経済的に活用するため、農業開発の中心となる混交熱帯農林研究センターのレベルアップを図ることを目

的としている。具体的には薬用植物、天然染料、熱帯果樹、胡椒など、この地域の自然と調和のとれた形で天然資源を商業化できるように、利用方法や品種改良などの研究、開発を行っている。チームリーダーの仁科雅夫専門家は、プロジェクトの開始とほぼ同時期の1990年8月に派遣された。薬用植物の研究を中心に4年間、この活動に携わった。

【ブラジルの概要】

日本からの移住者の多い国として知られるが、1908年から農業移民が始まり、サンパウロ周辺を中心に約117万人の日系人が住む。広大な国土にさまざまな民族が住む多民族社会を形成している。70年代には「ブラジルの奇跡」と呼ばれる工業化による高度経済成長を達成したが、インフレと対外債務に悩まされ、現在は農業を輸出戦略産業としている。アマゾン流域は天然資源の宝庫で、有用植物が新たに発見される可能性を秘めている。しかし地球上の酸素の半分近くはこの地域で生産されていると言われ、自然とのバランスのとれた開発が大きな課題となっている。
人口：1億5,332万人(1991年)
面積：851万1,965km²(日本の約22.5倍)
首都：ブラジリア



セネガル 砂漠の一滴

【協力活動内容】

サヘル地域に接するセネガルでも砂漠化から国土を守ることは重大な課題となっている。1986年から始まった「緑の推進協力プロジェクト」は、セネガル、ティエス州で青年海外協力隊が実施している植林活動である。植林のための技術のみならず、農村住民が植林活動に積極的に関わるようにするために、住民の現金収入の向上も狙って、植林と野菜栽培を組み合わせたアグロ・フォレストリーの普及活

動なども行っている。

植林を専門とする狩保みちを隊員は1993年から派遣されており、植林活動を定着させるために、木の確保のための井戸掘り、果樹を中心とした植林、換金作物作りなどの指導にあたる。

【セネガルの概要】

パリ/ダカール・ラリーの結核地として知られているこの国は、海拔100m以下という平坦地が続き、きわめて単調な地形を持つ。しかし北部のモーリタニアと接する地域ではサハラ砂漠の南縁に接し、半砂漠状となり、乾期にはハリハラ砂漠から熱風ハルマツクが吹き寄せてくる。一方、南部のガンビア川付近では年間降水量が2,000ミリを超え、熱帯雨林で覆われており、気候、植生は多様性に富んだ国である。民族衣装ブーブーはセネガルの風土の中で、華やかな色彩を放っている。
人口：753万人(1991年)
面積：19万6,722km²(日本のほぼ半分)
首都：ダカール



ネパール 天を突き破った雨

【協力活動内容】

世界的に名を知られる山々がそびえ立つ、急峻な地形を特徴に持つネパールでは、近年の森林伐採などの要因も加わって、雨期の豪雨により砂堆積、地滑り、斜面崩壊、洪水、河川決壊、氷河湖決壊などの自然災害が発生。時には人命、財産まで奪ってしまうという被害をもたらしている。このためネパール政府は治水を重視しており、1991年から日本は「ネパール治水砂防技術センタープロジェクト」

の協力を実施している。水害、土砂災害に対処できるネパール人技術者の養成を目的とする。ネパールの従来の技術と近代的技術を結合し、地域の持つ条件にあった技術開発も行う。また、災害による被害を最小限に食い止めるために、住民参加を促すようなデモンストレーションなどにも力を入れている。天保隊専門家は地滑り対策が専門で、ネパール人スタッフに野外調査等を通して技術指導を行っている。

【ネパールの概要】

6,000m以上の高峰が240もあるという山岳地帯が国土の大半を占める国。その雄大な景色と古くから残るヒンズー教の寺院の面影に惹かれ、登山客をはじめ、観光客が数多く訪れている。観光は貴重な外貨の収入源となっているが、増える人口に伴う生活のための薪の消費の増大に加え、登山者による燃料用薪の消費によって、森林面積が急速に減少してきている。立憲君主制の王政をとっているが、世界的な民主化の流れの中で、1991年に32年ぶりに総選挙を実施するなど、変化が見えている。
人口：1,960万人(1991年)
面積：14万797km²(北海道の約1.8倍)
首都：カトマンズ



パラグアイ 沈みゆく孤島の野生

【協力活動内容】

パラグアイとアルゼンチンとの国境に沿って流れるパラナ川のアジョラスでは、ヤシレタ水力発電所の建設が進められている。この建設に伴う水没予定のヤシレタ島に生息する動物を保護するために、1991年から始まったのがミニプロジェクトの「パラグアイ野生動物保護プロジェクト」。水没予定地の動物相の調査研究に加え、その保全のための手法などの研究を通して、パラグアイの野生動物等と

その保全管理技術の向上を図ることを目的としている。チームリーダーの山本昭彦専門家(環境管理学)と藤田昌弘専門家(動物生態学)、加藤宏保専門家(動物学)は、首都アスンシオンから車で5時間、それから小舟に中を積み込んで島に渡るという長旅の後、湿地、森林、砂漠、牧場と変化に富むこの島の中をキャンプをしながら調査を続ける。

【パラグアイの概要】

国の中央を貫流するパラグアイ川によって、この国は東部パラグアイと西部パラグアイに分けられる。東部パラグアイは国土の40%を占めているが、人口の90%以上が集中している。主要河川の一つパラナ川にはブラジルとの共同事業によるイタイ・イグムが建設されており、発電能力は約1,260万kWと巨大である。アルゼンチンとの共同事業によるヤシレタ・グムが完成すると、世界有数の電力輸出国になることが予想されている。
人口：440万人(1991年)
面積：40万6,752km²(日本の約1.1倍)
首都：アスンシオン

空白地帯をたどる旅

●フォトグラファー 吉田 勝美

南極を犬ゾリで探険したイギリス人チェリー・ガラードは、冒険とは「知的情熱の肉体的表現」という言葉を残した。私はこの言葉が大好きだ。

小学生の頃、社会科で使う地図帳を何時間も見つめて過ごした。地名の書き込みの多いヨーロッパや北アメリカでなく、砂漠やジャングル、極地などの地図上の空白に何故か興味を引かれた。その空白をわずかな知識と多くの想像力で埋めていった。写真撮影や取材を仕事にした時、地図上の空白地帯をくまなく訪ね、自分の目で確かめようと心に決めた。

空白地帯は必ずと言っていいほど自然環境が厳しく、そこには過酷な生活をしている人がいた。しかし不思議なことに、自然が強烈であればあるほど、そこに暮らす人たちの心は優しくなった。ドラム缶1本の水を手に入れるために、砂漠地帯を1日かけて水汲みに行く人、マラリアに悩まされながらジャングルの

奥深くに住む先住民、冬、マイナス50°Cにもなる極寒のツンドラで狩猟をするハンター。振り返ってみると、私の取材は、こうした過酷な環境に住む人たちの善意の手渡しによって支えられてきたのだった。ライフワークとして海外援助関係の撮影を始めてから、今年で約20年になる。JICAの仕事も、多くはこの地図上の空白地帯（開発途上国）を主なフィールドとするものだった。この間800人を超える専門家や青年海外協力隊員に出会い、協力現場で話を聞いた。人の数だけ協力の仕方は違う。しかし、現地の人々と真摯に接する姿は心にのこった。写真集の7つの物語はこうした人々のほんの一部を代表したものすぎない。あとがきを通してお世話になった数多くの人たちに感謝の気持ちを伝えたい。そしてこれまでに出会った数えきれない人たちに、自然がこれ以上過酷な試練を課さないことを願わないではいられない。

1994年 初夏



吉田勝美(よしだ・かつみ)
1948年香川県生まれ。東京写真短期大学フォト・ジャーナリズム研究室卒業。世界60カ国以上で戦争、海外援助、少数民族をテーマに撮影活動を続ける。現在、フリーランス。
主な海外取材作品掲載書：「アジアとの対話」、「北極圏」（いずれも日本放送出版協会発行）、「マレー猿は悪夢を見ない」（扶桑社）

SEVEN STORIES

地球の鼓動が聞こえてくる

●発行日／平成6年8月1日

●発行／国際協力事業団

〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル 私書箱216号
電話03(3346)5311～5314(受付台)

